

僻地の中学生における職業観形成の特質

武 衛 孝 雄

問 題

個人の職業観に関して、筆者はかつて、価値感の視点から追求し、その結果と、M.Rosenberg⁽¹⁾によって得られた米国での結果とを比較検討して、進路指導についての一般的な問題点を指摘し、さらにこれらの結果を分析して、職業観を、職業に関する(1)自己実現性重視(2)経済性重視⁽²⁾(3)社会性重視(4)義務性重視の4つの観点に分類できることを明らかにし、かつ各種の職業間にあらわれた価値のおきどころの明確な差異について吟味したが、本研究においても、上述の研究の一環として、職業観を、「職業が個人に対してもっている直接的な有用性についての価値意識」⁽³⁾として把握し、諸検討を試みた。⁽⁴⁾

一般に、価値は、ある対象に対する個人の包括的な態度の中核を形成しているものであるから、⁽⁵⁾職業観は、一職業に対して個人がもつ能力的適性の自覚、興味などをその中に包含し、さらに個人に内在する職業への動機づけ、要求、態度、満足感などと密接に結合していて、しかもそれらは、いずれも個人の中核的価値のひとつの発現形態と考えることができる。

かくて、職業観は、職業の選択ないし決定の過程における不可欠な要因のひとつである。⁽⁶⁾すなわち、個人はこの職業観に基づいて、一職業を希望し、あるいは決定するのであるし、また、そうあるべきである。従って、個人の適切な職業決定は、職業選択ならびに職業的適応（個人が遭遇する職業的発達上の諸問題に対する処理法の適当さ）と職業観との一致においてなされなければならない。それ故、職業観に関する的確な把握・理解は、個人の職業選択、職業的適応の解明にとっても、きわめて重要な意義をもっている。

従来、職業選択の要因として、職業適性、興味および人格特性が、とくに強調されてきた。⁽⁷⁾しかし、後述のように、中学高学年以上の職業的発達段階においては、職業選択は、単にこのような職業に対する性能や個人的関心のみではなく、個人の全人的な価値意識の根源にもふれてなされるべきである。すなわち、個人は、選択された職業により、その個人の価値を実現させ、要求を満足させ、同時に社会の要請に応じて、はじめて、職業的適応が達成されるのである。従って、中学上級生以上に対する進路指導の場においても、かれらの職業選択の根底にある職業観の構造に関する基礎的研究や職業的価値体系への考察なしには、成功しえないものと考えられる。

本研究では、対象を僻地の中学生におき、僻地における学校教育振興の一環としての進路指導改善上の問題点を探求するために、前述の立場から僻地の中学生の進路に関する現実的な希

望ならびに職業観とその形成に関連する諸要因を具体的に把握して、それらの実態および希望職業と職業観との関係などを分析し、僻地中学生の職業観形成の特質を考察して、その結果と進路指導との関連を追求した⁽⁹⁾。なお、対照群として、大都市ならびに地方中小都市の中学生を選定して、かれらに対しても僻地の中学生と同様の調査を進め、三者の結果を比較して、僻地の中学生における上述の特質を解明した。

方 法

(1) **対象** 過去2度の予備調査結果を反省して、本調査では、校区がそれぞれ本研究目的に合致すると考えられる下記3種の中学校（6校）3年生のうち、進学・就職各希望者とも、個別的に検討して、職業適性・興味・人格特性その他の諸要因から、客観的にも適職と一応認めうる職業を本人が第1希望職として従来から希望し、かつその職業に就くことに十分な自覚と決意を示している生徒に限定した⁽¹⁰⁾。もちろん、この中には、第1希望の職業ないし職場への就職がすでに内定している生徒も含まれている。

① 実験群(僻地)島根県隠岐島内公立各中学校（表1のA, B, C, D校）

② 対照群(地方都市)松江市内公立中学校（同E校）

（大都市）神戸市内公立中学校（同F校）

(2) **被調査者の抽出** 以上の方針に基づいて、具体的な被調査者の決定は、すでに各校で整備されている進路指導関係諸調査・検査結果ならびに累加記録などを参考し、かつ進路指導担当教員あるいはカウンセラーの指示に従って行なわれたが、その結果、被調査者として表1の生徒が抽出された。

表1 調査対象

調査対象	対象校	対象校区の環境	調査対象数			家庭環境診断検査（田研式）結果 とくに劣っている点	備 考
			男	女	計		
実験群（僻地）	A	農山村・僻地	49	36	85	子どものための施設 家庭の一般的雰囲気	水田耕作・山林が中心だが経済的に弱体 自給は困難
	B	普通農漁村・僻地	88	78	166	子どものための施設 家庭の一般的雰囲気	農業主・漁業従だが漁業で生計を維持する者も多い
	C	普通農（漁）村・僻地	27	23	50	文化的状態 両親の教育的関心	半農・半漁だが漁業は1本づりに限られ 僻地度最高 米は移入が必要
	D	その他・僻地	101	103	204	なし	本土からの物資の集散地 水産業・商業が主体
	計（実験群）		265	240	505		
対照群	地方都市 E	地方中小都市の市街地	205	210	415	なし	
	大都市 F	大都市の市街地	106	104	210	なし	
	計（対照群）		311	314	625		

(3) 時期 A～E校：1963年10月上旬

F校 : 1964年10月下旬

(4) 調査の技法 調査は、質問紙法、面接法ならびに自由作文によった。質問紙は、それぞれの教室で、担任教員あるいは筆者の逐次説明により、いっせいに記入させた。また、質問紙各項目に対する回答内容を一層具体的に把握したり、確認したりするために、一部の生徒または担任教員には質問紙と併せて面接を行ない、あるいは自由作文を課して調査した。質問紙は、予備調査結果を参考して改訂し、次のような4問からなる調査票を作成した。とくに、職業観調査（質問3）では、職業に関する現実的な17種の要求を掲げ、それぞれの要求を各自の希望職業がどの程度満足させるかという形で把握した⁽¹²⁾。すなわち、回答者が自己の希望職業に関して最も重要だと考える価値項目から順に順位を附して評価させたのである。

(5) 集計処理の仕方 ①研究対象人員 回答された希望職業がなお抽象的なもの、調査票への

進路希望(決定)・職業観調査

(調査前文) 省 略

質問 1: あなたは、この学校を卒業すれば、すぐに就職しますか。

(1) はい (2) いいえ (3) 家事につく (4) 上級学校に就学しながらつとめる

(5) 資格を得るための学校（美容学校・看護学校など）に就学しながらつとめる

→ いま、「いいえ」と答えなかった人は、つぎの間に答えて下さい。

① 就職先がすでにはっきり決定しておれば、その職場の名称と、できればつく仕事の種類（事務員とか機械工とか）を書いて下さい。

職場の名称：

仕事の種類：

それは、あなたの従来からの希望どおりの職場（あるいは職業・職務）ですか。

(1) はい (2) いいえ（ほんとうは に就職して 関係の仕事をしたかった）

② まだ就職先が決定していない人は、じっさいにどんな職場（あるいは職業・職務）につきたいと望んでいますか。できるだけ詳しく書いて下さい。

希望する職場の名称：

希望する仕事の種類：

③ さらに就職しながら上級学校や資格を得るための学校に進みたい人は、希望する学校名を書いて下さい。希望校が2校以上ある人は、希望順に2校だけを書いて下さい。

第1希望校：

第2希望校：

④ 差しつかえなければ、あなたがふつうに進学しない理由を書いて下さい。

→ 「いいえ」と答えた人は、つぎの間に答えて下さい。

⑤ 志望している上級学校はどこですか。第1志望校、第2志望校、および進みたいコース名を書いて下さい。

第1志望： 高校 科
高専

第2志望： 高校 科
高専

⑥ その上級学校あるいはさらに大学を卒業すれば、どんな職業につきたいと望んでいますか。で

できるだけ詳しく書いて下さい。

つきたい職業（または仕事の種類）：

質問 2. あなたが、いま答えた職業に、何のために、そしてなぜつきたいのですか。その職業につく目的および理由をできるだけ詳しく書いて下さい。

目的：

理由：

質問 3. 理想的な職業または仕事に対する人びとの要求をつぎに挙げました。このリストを読んで、あなたの希望する職業（第1希望）が、どの程度、これらの要求を満足させるかを考えて下さい。回答は、つぎの記入法によること。

（記入法）イ……あまり重要でない。または無関係だと考えている。

ロ……（普通程度に）重要だと考えている。

ハ……非常に重要だと考えている。

以下の各項目のイロハを上規準に従って、そのいずれかに○をつけること。

（例） イ ロ ⑤（ ）

あなたが希望している職業は、↓	重要でない 又は無関係	普通	非常に 重要
(1) 自分の特別な能力や適性を生かす機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(2) 十分な収入を得て、豊かな生活をする事が期待できる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(3) 社会的地位や名声が得られる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(4) 社会に役立っているという誇りをもつことができる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(5) 自分の創造性や独創性を生かすことができる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(6) 安定した、保証された将来への見通しが得られる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(7) さまざまな人達といっしょに仕事をする機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(8) 人間としての義務をはたしているという喜びが与えられる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(9) 他人からの監督を受けることが少なく、比較的自由である。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(10) 昇進・昇給の機会が多い。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(11) 指導者としての能力がみがかれる機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(12) 今まで世話になった人たちに報いる機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(13) 他人を助力（助成）する機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(14) 冒険的なことやめずらしいことや、他人のあまり やらないことをする機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(15) その職業につくことによっていろんなことを勉強する機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(16) 仕事の余暇や娯楽の時間が十分にとれ、楽しむことができる。……………	イ	ロ	ハ（ ）
(17) その他〔くわしく書いて下さい：……………〕……………	イ	ロ	ハ（ ）

あなたが、いまハを○で囲んだものがありましたら、それらのうちとくに重要なもの2つを選んで、ハの次にある（ ）の中に、重要な順に1，2の順位をつけて下さい（ただしハを○で囲んだ項目がなかったり1つしかない場合は、そのままにしておくこと）。

（例） イ ロ ⑤(1)

質問 4 （職業興味、適性の自覚および職業情報収集法ならびにそれらの程度に関する調査その他5項目）省 略

記述が不十分または不適當なものなどで、しかもそれらの記述内容を確認できなかった調査票34（男14，女20）を除外して、実際に集計し研究対象としたのは、1096名（男562，女534）である。その内訳は、表2の通りである。②希望職業の分類 後の諸検討への便宜を考慮し、また

調査票に現れた個々の希望職業が具体的に把握できるように、あえて既存の分類法に固執せず、表8のような独自の分類を行ない、それにより分析を進めた。たとえば、同じ事務的職業にあっても、公務員事務職と会社事務員との間では、職業観に若干の隔りが認められたので、これらを一括せずに、それぞれ独立して分類したのである。③職業観の集計 回答者の各項目への評価の高さに従って、各項目ならびに各個人ごとを一応、画一的重みづけによる評点（0～3点）を算出して、その平均値を表示することとした。また、多くの項目を整理して把握・理解しやす

表2 研究対象人員

	実 験 群					対 照 群		
	A	B	C	D	計	E	F	計
男	49	88	25	100	262	200	100	300
女	33	78	23	100	234	200	100	300
計	82	166	48	200	496	400	200	600

くするために、各項目間の相関関係すなわち結合度により、数個の項目を一括し、表3のような4種の項目群を構成して、同様の方法で諸検討にこれを用いた。

表3 職業観の構成

価 値 項 目 群	項 目 (要約)	
	番号	価 値
自己実現性重視群	(1) (5)	適性・能力 独 創 性
経済性重視群	(2) (3) (6) (10)	収 入 社会的地位 安 定 性 昇進・昇給
義務性重視群	(4) (8) (12)	社会的貢献 人間の義務 報 恩
社会性重視群	(7) (13)	社 会 性 助 力

結 果 な ら び に 考 察

1 希望進路

就職・進学希望別各人員を、性別・地域別に示すと、表4の通りである。すなわち、就職

表4 希望進路の人員（以下各表で上数は実数、括弧内下数は百分率を示す）

	僻 地			地 方			大 都 市		
	男	女	計 a	男	女	計 b	男	女	計 c
進 学	153 (58.4)	127 (54.3)	280 (56.5)	180 (90.0)	178 (89.0)	358 (89.5)	91 (91.0)	92 (92.0)	183 (91.5)
就 職	82 (31.3)	79 (33.8)	161 (32.5)	20 (10.0)	21 (10.5)	41 (10.3)	8 (8.0)	7 (7.0)	15 (7.5)
未 定	27 (10.3)	28 (11.9)	55 (11.1)	0	1 (0.5)	1 (0.3)	1 (1.0)	1 (1.0)	2 (1.0)
計	262 (100.0)	234 (100.0)	496 (100.0)	200 (100.0)	200 (100.0)	400 (100.0)	100 (100.0)	100 (100.0)	200 (100.0)

有意差 a-b: $P < .01$ a-c: $P < .01$ χ^2 検定

いて、僻地性の高い地区（表1参照）の中学生に就職希望者の多いことが目立つ。

一般に、僻地の多くの生徒が、このように進学を希望しないまたは希望できない理由について、かれら自身は、表6のように、学力の不足、貧困、勉学意欲喪失などを挙げているが、このことは、僻地環境における経済的、文化的後進性との関連が大きいように思われる。

一方、進学希望者の内訳をみると、表7のようである。僻地の生徒で、高校の水産・商船コ

希望者は、僻地校で32.5%、地方都市校で10.3%、大都市校で7.5%を占めていて、予想通り、僻地の就職希望率は他よりも圧倒的に高い。僻地校の内訳を検討すると、表5のように、4校中でもC校が最高の52.1%を、ついでA校が50.0%を示して

僻地の中学生における職業観形成の特質

表 5 僻地 4 校における希望進路の人員

	A 校			B 校			C 校			D 校			合 計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
進 学	20 (40.8)	11 (33.3)	31 (37.8)	53 (60.2)	41 (52.6)	94 (56.6)	11 (44.0)	12 (52.2)	23 (47.9)	69 (69.0)	63 (63.0)	132 (66.0)	153 (58.4)	127 (54.3)	280 (56.5)
就 職	21 (42.9)	20 (60.6)	41 (50.0)	26 (29.5)	23 (29.5)	49 (29.5)	14 (56.0)	11 (47.8)	25 (52.1)	21 (21.0)	25 (25.0)	46 (23.0)	82 (31.3)	79 (33.8)	161 (32.5)
未 定	8 (16.3)	2 (6.1)	10 (12.2)	9 (10.2)	14 (17.9)	23 (13.9)	0	0	0	10 (10.0)	12 (12.0)	22 (11.0)	27 (10.3)	28 (11.9)	55 (11.1)
計	49	33	82	88	78	166	25	23	48	100	100	200	262	234	496

表 6 就職希望者が進学を希望しない理由

	僻 地			地 方			大 都 市		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
勉 学 が き ら い	19 (23.2)	18 (22.8)	37 (23.0)	3 (15.0)	4 (19.0)	7 (17.1)	2 (25.0)	3 (42.9)	5 (33.3)
学 力 の 不 足	18 (22.0)	24 (30.4)	42 (26.1)	4 (20.0)	6 (28.6)	10 (24.4)	1 (12.5)	1 (14.3)	2 (13.3)
貧 困	18 (22.0)	19 (24.1)	37 (23.0)	7 (35.0)	5 (23.8)	12 (29.3)	2 (25.0)	1 (14.3)	3 (20.0)
早く就職したい	10 (12.2)	12 (15.2)	22 (13.7)	1 (5.0)	0	1 (2.4)	0	1 (14.3)	1 (6.7)
よい職場がある	4 (4.9)	3 (3.8)	7 (4.3)	0	0	0	1 (12.5)	0	1 (6.7)
そ の 他	3 (3.7)	0	3 (1.9)	0	2 (9.5)	2 (4.9)	1 (12.5)	0	1 (6.7)
無 記 入	10 (12.2)	3 (3.8)	13 (8.1)	5 (25.0)	4 (19.0)	9 (22.0)	1 (12.5)	1 (14.3)	2 (13.3)
計 (就職希望者)	82	79	161	20	21	41	8	7	15

表 7 進学希望者の内訳

	僻 地			地 方			大 都 市		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
普 通 科	70 (45.8)	93 (72.3)	163 (58.2)	91 (50.6)	85 (47.8)	176 (49.2)	59 (64.8)	68 (73.9)	127 (69.4)
商 業 科	5 (3.3)	20 (15.7)	25 (8.9)	24 (13.3)	51 (28.7)	75 (20.9)	10 (11.0)	13 (14.1)	23 (12.6)
工 業 科	21 (13.7)	0	21 (7.5)	48 (26.7)	0	48 (13.4)	13 (14.3)	0	13 (7.1)
水 産・商 船 科	53 (34.6)	0	53 (18.9)	5 (2.8)	0	5 (1.4)	4 (4.4)	0	4 (2.2)
家 庭 科	0	11 (8.7)	11 (3.9)	0	27 (15.2)	27 (7.5)	0	9 (9.8)	9 (4.9)
そ の 他	2 (1.3)	1 (0.8)	3 (1.1)	4 (2.2)	5 (2.8)	9 (2.5)	3 (3.3)	1 (1.1)	4 (2.2)
未 定	2 (1.3)	2 (1.6)	4 (1.4)	8 (4.4)	10 (5.6)	18 (5.0)	2 (2.2)	1 (1.1)	3 (1.6)
計	153	127	280	180	178	358	91	92	183

ースを希望する者は、男子の34.6%を占めていて、対照群よりも遙かに多く、きわめて特徴的である。このことは、今回の被調査者の生育環境条件（離島）から当然とも考えられるが、後述の職業観におけるかれらの経済性重視の考え方と非常に密接な関連があるように思われる。なお、希望コースに関するその他の点では、対照群との差は、さほど顕著でない。

2 希望職業

希望職業の各人員を、性別・地域別に示すと表8の通りである。僻地の生徒は、希望職が比較的、一定の職業に集中していて、対照群の生徒ほどのヴァリエティがみられない。すなわち、僻地の生徒においては、専門的職業としての技師・司法職・医師やいわゆるサラリーマンなどを志す者は、大都市の生徒よりも少なく、逆に理容・美容師、看護婦をはじめ、自動車整備工、機械工あるいは洋裁師などの技能的職業や運輸・通信関係の現場への就職希望が集中していることが目立つのである。このことは、むろん、学力の低さ、勉学意欲の乏しさ、貧困あ

表8 希望職業の分類ならびに人員

	僻 地			地 方			a - b の 有意性	大 都 市			a - c の 有意性
	男	女	計 a	男	女	計 b		男	女	計 c	
技 術	34 (13.0)	3 (1.3)	37 (7.5)	34 (17.0)	4 (2.0)	38 (9.5)		29 (29.0)	3 (3.0)	32 (16.0)	**
司 法	1 (0.4)	0	1 (0.2)	3 (1.5)	0	3 (0.8)		2 (2.0)	0	2 (1.0)	
医 師	3 (1.1)	1 (0.4)	4 (0.8)	5 (2.5)	2 (1.0)	7 (1.8)		4 (4.0)	2 (2.0)	6 (3.0)	*
教 師	4 (1.5)	16 (6.8)	20 (4.0)	7 (3.5)	20 (10.0)	27 (6.8)		3 (3.0)	7 (7.0)	10 (5.0)	
芸 術	1 (0.4)	2 (0.9)	3 (0.6)	2 (1.0)	3 (1.5)	5 (1.3)		1 (1.0)	2 (2.0)	3 (1.5)	
会 社 事 務	55 (21.0)	48 (20.5)	103 (20.8)	43 (21.5)	45 (22.5)	88 (22.0)		24 (24.0)	39 (39.0)	63 (31.5)	**
公 務 員 事 務	16 (6.1)	16 (6.8)	32 (6.5)	21 (10.5)	15 (7.5)	36 (9.0)		8 (8.0)	9 (9.0)	17 (8.5)	
技 能	68 (26.0)	43 (18.4)	111 (22.4)	59 (29.5)	48 (24.0)	107 (26.8)		20 (20.0)	22 (22.0)	42 (21.0)	
理 容・美 容	5 (1.9)	33 (14.1)	38 (7.7)	4 (2.0)	18 (9.0)	22 (5.5)		2 (2.0)	4 (4.0)	6 (3.0)	*
看 護 婦	—	48 (20.5)	48 (9.7)	—	13 (6.5)	13 (3.3)	**	—	1 (1.0)	1 (0.5)	**
販 売	9 (3.4)	20 (8.5)	29 (5.8)	7 (3.5)	26 (13.0)	33 (8.3)		3 (3.0)	8 (8.0)	11 (5.5)	
運 輸・通 信	55 (21.0)	2 (0.9)	57 (11.5)	14 (7.0)	3 (1.5)	17 (4.3)	**	2 (2.0)	1 (1.0)	3 (1.5)	**
農 林 漁 労 務	10 (3.3)	0	10 (2.0)	1 (0.5)	0	1 (0.3)		1 (1.0)	0	1 (0.5)	
そ の 他	1 (0.4)	2 (0.9)	3 (0.6)	0	3 (1.5)	3 (0.8)		1 (1.0)	2 (2.0)	3 (1.5)	
計	262	234	496	200	200	400		100	100	200	

有意差 **P<.01 *.05>P>.01 x²検定

るいは家庭の教育的関心の低さなどに起因する進学率の低さとも大いに関連があるが、作文を検討した結果、上述の各種職業が、かれらの生活環境とは全く異なった、きわめて都会的で明

るい清潔な職業としてのイメージをかれらに常に与えているためであるが、また同時に、かれらの「職業選択の動機」(後述)でも知られるように、個々の職業情報の不十分な把握または職業情報の貧困にも基づいていると考えられる。一方、中学卒業者でも一定の技能さえ修得すれば、誰でも貧困から救われ豊かな経済生活を営むことができるという、職業というものに対する一般的な考え方すなわち一般的職業観の偏りにもよると思われる(後述)。

3 希望勤務地

希望する職場については、表9に示す通りである。すなわち、僻地生徒の8割弱の者が、他

表 9 僻地生徒の希望勤務地

	A 校			B 校			C 校			D 校			合 計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
郷 土	2 (4.1)	1 (3.0)	3 (3.7)	3 (3.4)	2 (2.6)	5 (3.0)	1 (4.0)	0	1 (2.1)	4 (4.0)	5 (5.0)	9 (4.5)	10 (3.8)	8 (3.4)	18 (3.6)
都 市	39 (79.6)	28 (84.8)	67 (81.7)	80 (90.9)	61 (78.2)	141 (85.0)	24 (96.0)	23 (100.0)	47 (97.9)	80 (80.0)	54 (54.0)	134 (67.0)	223 (85.1)	166 (70.9)	389 (78.4)
未 定	8 (16.3)	4 (12.2)	12 (14.6)	5 (5.7)	15 (19.2)	20 (12.0)	0	0	0	16 (16.0)	41 (41.0)	57 (28.5)	29 (11.1)	60 (25.6)	89 (17.9)
計	49	33	82	88	78	166	25	23	48	100	100	200	262	234	496

地域とくに大都市で職業生活を営むことを希望しているが、しかしなお、男子の3.8%、女子の3.4%は、できれば郷里に残りたいと訴え、地元での職業生活に大きく期待をかけている。他地域で就職したいまたは就職しなければならない理由については、表10のように、かれらは、地元の企業に将来性のないこと、能力に適した仕事を獲得することの困難さ、あるいは収入の多い仕事につく機会に乏しいことなどを挙げている。また、面接結果から知られたことであるが、

表 10 僻地生徒における他地域就職希望の理由

	僻 地 計		
	男	女	計
能力に適した仕事がない	107 (48.0)	105 (63.3)	212 (54.5)
もうかる仕事につく機会がない	61 (27.4)	32 (19.3)	93 (23.9)
人間関係がうまくいかない	11 (4.9)	9 (5.4)	20 (5.1)
余暇・娯楽が楽しく有効に過ごせぬ	37 (16.6)	40 (24.1)	77 (19.8)
企業に将来性がない	145 (65.0)	85 (51.2)	230 (59.1)
勉学・研修の機会に乏しい	36 (16.1)	37 (22.3)	73 (18.8)
家族が本土にいる	1 (0.4)	7 (4.2)	8 (2.1)
その他	6 (2.7)	4 (2.4)	10 (2.6)
計 (就職を希望する者)	223	166	389

注 1人3項目以内の回答を
認めて集計したため通常、
合計欄で100%を越える。

上述のような表面的な理由の奥底には、学校卒業後もなお地元に残留する者が、とかく無能力者として誤解され、周囲から軽蔑してみられがちであるという一般的な風潮が、僻地の一部の地域社会〔とくに僻地性(後進性)のより強い地域〕に存在することが、かれらの気持ちを他地域とくに大都市に向けてることの一層の拍車をかけていると考えられる。

4 職業選択の動機、職業情報の収集法

僻地生徒の職業選択の動機や職業情報の収集方法については、表11のように、対照群に比して、教師、マスコミあるいは書物などを通じ職業情報を収集したものが少なく、逆に、何にも頼らず「自分ひとりで考えて」と答えた生徒が31.9%を占めていることは注目に値する。とくに学校や教師から職業情報や職業選択の大きい動機づけを得た生徒が大都市の場合の約1/3しか

表 11 職業選択の動機

	僻 地			地 方			大 都 市		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
家 族 の 者 1)	129 (49.2)	127 (54.3)	256 (51.6)	93 (46.5)	105 (52.5)	198 (49.5)	48 (48.0)	56 (56.0)	104 (52.0)
友 人 2)	26 (9.9)	30 (12.8)	56 (11.3)	18 (9.0)	28 (14.0)	46 (11.5)	10 (10.0)	11 (11.0)	21 (10.5)
先 輩	20 (7.6)	25 (10.7)	45 (9.1)	17 (8.5)	18 (9.0)	35 (8.8)	11 (11.0)	12 (12.0)	23 (11.5)
親 戚 3)	37 (14.1)	28 (12.0)	65 (13.1)	19 (9.5)	17 (8.5)	36 (9.0)	7 (7.0)	9 (9.0)	16 (8.0)
先 生 4)	26 (9.9)	25 (10.7)	51 (10.3)	26 (13.0)	28 (14.0)	54 (13.5)	29 (29.0)	32 (32.0)	61 (30.5)
書 物 5)	11 (4.2)	7 (3.0)	18 (3.6)	21 (10.5)	22 (11.0)	43 (10.8)	13 (13.0)	9 (9.0)	22 (11.0)
新 聞・雑 誌	24 (9.2)	18 (7.7)	42 (8.5)	23 (11.5)	14 (7.0)	37 (9.3)	10 (10.0)	12 (12.0)	22 (11.0)
テレビ・ラジオ	15 (5.7)	20 (8.5)	35 (7.1)	27 (13.5)	30 (15.0)	57 (14.3)	11 (11.0)	16 (16.0)	27 (13.5)
自分自身の探求	85 (32.4)	73 (31.2)	158 (31.9)	49 (24.5)	41 (20.5)	90 (22.5)	21 (21.0)	19 (19.0)	40 (20.0)
とにかく好き	11 (4.2)	8 (3.4)	19 (3.8)	10 (5.0)	13 (6.5)	23 (5.8)	7 (7.0)	6 (6.0)	13 (6.5)
そ の 他	10 (3.8)	8 (3.4)	18 (3.6)	8 (4.0)	4 (2.0)	12 (3.0)	5 (5.0)	5 (5.0)	10 (5.0)
計 6)	262	234	496	200	200	400	100	100	200

注 1) とくに両親ついで兄・姉 2) とくに中3における級友ついで近隣の友人 3) とくに叔父
叔母 4) 学級担任, 他に社会科担当教員, 小学校時代の恩師, 進路指導担当教員 5) 伝記・
科学関係書が中心 6) 数項目にわたる回答をも認めて集計したため, 通常, 合計欄で100%を
越える。

ない実態から、僻地校に経験豊かな中堅教員を配置し、進路指導を早急に一層充実させることの必要性を痛感する。

5 職業観

各職業観の評点平均ならびに最重視項目・項目群の人員を、それぞれ性別・地域別に示すと、表12～15のようになる。

僻地の中学生における職業観形成の特質

表12 職業観の評点平均

項目番号	職業観項目	群分類	僻地 a	地方 b	a - b の有意性	大都市 c	a - c の有意性
(1)	適性・能力	①	1.03	1.86	*	2.09	**
(2)	社会的地位	②	1.33	1.37		1.30	
(3)	社会的地位	③	0.34	0.47		0.38	
(4)	社会的地位	④	0.96	1.15		1.33	**
(5)	独創性	⑤	0.92	1.29		1.73	**
(6)	安定性	⑥	1.68	1.44	**	1.42	**
(7)	安定性	⑦	1.44	1.37		1.62	
(8)	安定性	⑧	1.06	1.31		1.24	
(9)	昇進・昇給	⑨	0.62	0.93	*	0.82	
(10)	昇進・昇給	⑩	1.31	0.73		0.97	**
(11)	指導性	⑪	0.82	0.84		0.85	
(12)	指導性	⑫	0.96	0.75		0.85	
(13)	指導性	⑬	1.24	1.18		1.39	
(14)	指導性	⑭	0.46	0.69		0.53	
(15)	指導性	⑮	1.47	1.46		1.24	
(16)	指導性	⑯	0.96	0.96		0.74	
平均評点			1.04	1.11		1.16	**

有意差 **P<.01 *.05>P>.01 t 検定

表13 職業観項目群の評点平均

	僻地			地方			a - b の有意性	大都市			a - c の有意性
	男	女	計 a	男	女	計 b		男	女	計 c	
自己実現性①	1.04	0.91	0.98	1.70	1.45	1.58	**	2.08	1.74	1.91	**
経済性②	1.61	1.24	1.44	1.29	1.10	1.20	**	1.29	1.17	1.23	**
社会性③	1.34	1.35	1.34	1.14	1.40	1.27	**	1.19	1.82	1.51	**
義務性④	0.96	1.03	0.99	1.06	1.08	1.07	**	1.09	1.19	1.14	**

有意差 **P<.01 t 検定

まず、僻地中学生の評点は、表12、13のように比較的低く、従って希望職業に関する価値意識の低いことが知られる。とくに顕著な傾向として、たとえば表12で知られるように、僻地生徒は、希望職業に関する「適性・能力」「独創性」や「社会への貢献」などを軽視または無視し、「安定性」「昇進・昇給」などを、対照群の生徒よりも高く評価している。この16項目を4つの価値項目群として総合した表13をみても同様の傾向が窺われる。一般に、個人を職業的成功に導き、あるいは職業的適応を目標とした適切な職業選択にとって、最も重要な要因と考えられる内在的職業観すなわち自己実現性重視の職業観が、僻地生徒によって上述のようにきわめて低く評価され、また、この職業観に対して、他方の極たる外在的職業観すなわち報酬や地位に位置づけられた経済性重視の職業観が高く評価されていることは注目に値しよう。このことは、前述のように、かれらの職業希望の特色となって具現されているが、経済性重視の職業観の形成は、結局、僻地のおかれている限定された地理的、文化的環境や経済生活の後進性に深く根ざしていると考えられる。

僻地の中学生における職業観形成の特質

表14 職業観における最高評価項目の人員

項目番号	職業観項目	僻地 a	地方 b	a - b の有意性	大都市 c	a - c の有意性
(1)	適性・能力	25 (5.0)	74 (18.5)	**	49 (24.5)	**
(2)	収入	52 (10.5)	40 (10.0)		15 (7.5)	
(3)	社会的地位	0	4 (1.0)		0	
(4)	社会的貢献	22 (4.4)	21 (5.3)		11 (5.5)	
(5)	独創性	19 (3.8)	24 (6.0)		23 (11.5)	**
(6)	安定性	77 (15.5)	35 (8.8)	**	12 (6.0)	**
(7)	社会性	59 (11.9)	35 (8.8)		28 (14.0)	
(8)	人間の義務	31 (6.3)	29 (7.3)		9 (4.5)	
(9)	自由	12 (2.4)	15 (3.8)		5 (2.5)	
(10)	昇進・昇給	31 (6.3)	11 (2.8)	*	5 (2.5)	*
(11)	指導性	12 (2.4)	12 (3.0)		4 (2.0)	
(12)	報恩	23 (4.6)	10 (2.5)		6 (3.0)	
(13)	助力	42 (8.5)	25 (6.3)		15 (7.5)	
(14)	冒険	7 (1.4)	12 (3.0)		3 (1.5)	
(15)	勉学	62 (12.5)	36 (9.0)		11 (5.5)	**
(16)	余暇	22 (4.4)	17 (4.3)		4 (2.0)	
計		496	400		200	

有意差 **P>.01 *.05>P>.01 x²検定

表15 職業観における最高評価項目群の人員

	僻地			地方			a - b の 有意性	大都市			a - c の 有意性
	男	女	計 a	男	女	計 b		男	女	計 c	
自己実現性 ㉔	27 (10.3)	17 (7.3)	44 (8.9)	59 (29.5)	39 (19.5)	98 (24.5)	**	48 (48.0)	24 (24.0)	72 (36.0)	**
経済性 ㉕	99 (37.8)	61 (26.1)	160 (32.3)	47 (23.5)	39 (19.5)	86 (21.5)	**	18 (18.0)	14 (14.0)	32 (16.0)	**
社会性 ㉖	44 (16.8)	57 (24.4)	101 (20.4)	20 (10.0)	40 (20.0)	60 (15.0)	*	10 (10.0)	33 (33.0)	43 (21.5)	
義務性 ㉗	37 (14.1)	39 (16.7)	76 (15.3)	27 (13.5)	33 (16.5)	60 (15.0)		11 (11.0)	15 (15.0)	26 (13.0)	

有意差 **P<.01 *.05>P>.01 x²検定

因みに、職業的成功や職業的満足感を得るためには、個人が適切な動機づけをもち、生産意欲をかきたてることのできるような職業を選択しなければならないが、この生産意欲を発揮できる要因として、B. Russell は、個人がその職場において自己の意志を働かせる可能性を保持していることを指摘し、また H. J. Ruttenberg は、職場における人々の基本的要求、生産力および満足感に関し研究して、生産意欲を高揚させて個人を職業的成功に導く重要な要因のひ

とつが、前述の「自己実現」にほかならないことを主張している。⁽⁴⁾

6 希望職業と職業観

上述のことをさらに具体的に理解するために、希望職業と職業観との関連を地域別にみたが、その結果は表16に示す通りである。これは、表8で分類した14種の希望職業の中から典型的な職業9種を選んで、それらの職業に関する職業観をみたものであるが、僻地の生徒と大都市の生徒との間で、それぞれの職業観において、評点平均の分散や序列の違い、価値意識の差異

表16 希望職業と職業観との関連（括弧内は評点平均を示す）

	自己実現性		経済性		社会性		義務性	
	僻地	大都市	僻地	大都市	僻地	大都市	僻地	大都市
技術	1 (1.01)	1 (2.13)	1 (1.48)	3 (1.27)	6 (1.29)	9 (1.40)	4 (0.99)	5 (1.14)
教職	4 (0.98)	3 (2.03)	4 (1.45)	8 (1.16)	1 (1.38)	1 (1.61)	1 (1.03)	1 (1.19)
会社事務員	5 (0.97)	7 (1.87)	2 (1.47)	6 (1.22)	2 (1.37)	2 (1.60)	5 (0.97)	7 (1.11)
公務員事務職	7 (0.95)	8 (1.74)	5 (1.43)	9 (1.15)	2 (1.35)	4 (1.55)	1 (1.03)	4 (1.16)
技能	3 (0.99)	2 (2.09)	6 (1.42)	1 (1.32)	7 (1.28)	8 (1.42)	4 (0.99)	6 (1.12)
理容・美容	3 (0.99)	5 (1.92)	2 (1.47)	2 (1.29)	4 (1.33)	5 (1.53)	3 (1.00)	2 (1.18)
看護婦	6 (0.96)	4 (1.97)	2 (1.46)	7 (1.21)	1 (1.38)	3 (1.57)	2 (1.02)	3 (1.17)
販売	7 (0.95)	9 (1.72)	7 (1.40)	4 (1.25)	3 (1.35)	6 (1.47)	6 (0.95)	8 (1.09)
運輸・通信	2 (1.00)	6 (1.91)	5 (1.43)	5 (1.23)	5 (1.30)	7 (1.45)	6 (0.95)	7 (1.11)
上記のみの 平均(注)	0.98	1.96	1.45	1.25	1.33	1.55	0.99	1.13
同 SD	0.017	0.133	0.024	0.052	0.041	0.073	0.028	0.033
全体の平均	0.98	1.91	1.44	1.23	1.34	1.51	0.99	1.14
同 SD	0.032	0.138	0.031	0.059	0.050	0.076	0.035	0.039
分散の差	F=19.10 ^{**}		F=3.50 ^{**}		F=2.32 ^{**}		F=1.25 [*]	

有意差 **P<.02 *.10>P>.02 F検定

(注) 各項目群内で有意の差が認められる(いずれもP<.01 t検定)。

を明確に知ることができる。僻地生徒の職業観評点は、経済性重視群を除いて大都市生徒のそれよりも低く、分散もより小さい。すなわち、僻地の生徒は、各種の職業に関してほぼ一様に経済的価値を強く体感する傾向がみられるのみで、他の点で大都市の生徒ほど明確な価値意識をもっていないことがここでも知られる。しかも、各職業観の評価の高さの順で序列された僻地生徒の希望職業は、大都市生徒のそれと、順位において必ずしも一致していない。たとえば、経済性重視の職業観において、「公務員事務職」は僻地では第5位にあるが、大都市では低く評価されていて最下位である。同様に、職業観の大きい隔りは、「教員」や「看護婦」などにおいても見出される。自己実現性重視の職業観では、「技師」は僻地、大都市ともに最高

位を示すが、「看護婦」や「運輸・通信職」では、かなりの開きが認められる。社会性重視の職業観では、「教員」は僻地、大都市ともに最高位に評価されているが、「販売職」や「看護婦」では、若干の隔りが認められる。以下同様にして観察すれば、評点の開きや序列の違いから一職業に関する価値のおきどころの差異などを把握することができよう。

7 職業観の発達

かつて E. Spranger は、その鋭い観察力と洞察力で、青少年の職業観を分析し、また、近年 E. Ginzberg らは、職業選択過程を発達的にとらえて、青少年の職業選択の主要因として、11～12才に職業への興味、13～14才に職業への能力、15～16才に職業観がそれぞれ現れてくると述べているが⁽¹⁷⁾、増田の日本人に関する研究によれば、職業観は性能よりも先行して、12～15才すなわち中学生段階で強い要因となって出現している⁽¹⁸⁾。さらに、中学3年間の職業観を具体的に観察した瀬川によれば、中学生の職業観は、①少年的な興味の観点②衣食住に直接有利な事実に着目する観点③客観的な観点④附带的・経済的な職場条件に着目する観点の4類型に分類できるとし、1年生では各観点の均分がとれているが、2年生では③が増加し、3年生では③とともに②が多く現れ、①が急激に弱くなっている⁽¹⁹⁾。中村も、中学生の職業観を4種に分類し、その実態を分析して、中学生の55%は社会的な理想主義的職業観（社会性の観点）、30%は個人的な理想主義的職業観（自己実現性の観点）、10%は物質的な経済的職業観（経済性の観点）残りは文化的職業観をもっていると述べているが⁽²⁰⁾、伊藤の研究では、経済目的が人間完成目的に先行して出現している⁽²¹⁾。

このように、研究者により結果に若干の開きはあるが、職業観は、M. Rosenberg のいうように、発達のみにて、概して職業によって獲得することができるものから、仕事そのものの才能や適性の活用へと移行するのであり、換言すれば、道具的価値としての職業は、次第に内在的価値としての職業へと発達するとみるのが妥当であろう⁽²²⁾。

職業的発達段階を規定している D. E. Super らは、興味期（11～12才）、能力期（13～14才）の次に来る14才以上の開発期には、職業に対する要求、興味、機会などが全面的に考慮されると述べているが⁽²³⁾、この時期は、ちょうど中学上級から高校、大学にいたる発達段階にあたる。青年期の重要な特徴として、精神の世界、価値の発見ということが、一般に言われているが、この時期にある生徒たちは、今後成長するにつれて、それぞれきわめて複雑な価値体系をそなえていく。青年は、その独創性を生かし、自己の適性を開発させたいと希望する反面、希望する一職業から得られる外的報酬すなわち収入、地位や安定性の点も考慮に入れなければならない。それは、単に自己実現性重視の職業観の場合だけではなく、社会性重視の職業観などの場合にも言えるであろう。

8 僻地中学生の職業観と進路指導

反省・混乱・多義的選択の時期をすごしている中学3年生の今回の被調査者たちも、今後の生活過程において、個人的動揺と経済的動揺とが混乱して、その上で新しい職業観や欲求が生まれ、その後さらにそれらの変動や葛藤が生ずることは、十分に予想されるところである。し

かも個人の職業的発達には職業選択をもって完了するのではなく、その生涯を通じて継続するのであるから、職業観については、つねに個々の発達の考察が必要であり、今後の追跡研究が望まれるのである。そして、長期的な態度で、個人の職業観とかれの職場での職業的適応や職業的満足感との関連を追求し、職業観がその個人の生活全般における価値感・人生観に与える影響を分析して「望ましい職業観」を追求し、その形成のために、学校教育において行なわれるべき具体的実践内容を早急に打ち出さなければならない。⁽²⁴⁾とくに、本研究でみたように、僻地の生徒においては、郷土を離れることにより、封建制と貧困から救われ、表面的に人間らしい生活がおくられるという今日の生産構造の中で、真に生産的な望ましい職業観をもたせるための教育的施策を考究することは、今後の大きい課題でもある。

このような個人的、社会的価値体系の確立については、従来、中学生の発達段階では、あまり問題とされず、その進路指導においては、個人の職業適性の分野を探り、その職業興味の方向を明らかにすることによって、職業選択上の助言を行っていたのであるが、これでは十分ではなく、今後の進路指導は、職業観の葛藤を解決し、個人的にも、社会的にも満足されうるような職業選択の決定行為にその核心がおかれるべきである。⁽²⁵⁾しかし、就職直前になって、わずかの初任給の違いで、従来からの職業観に基づく希望分野の職業を潔く捨てて、全く他の方向の職業につくことを決意する生徒は少なくない。中西が指摘するように、職業希望のこのような変化は、学校時代の理想化から、職業人としての現実化への推移という単なる記述的解決によってすまされる問題ではないのである。⁽²⁶⁾ここに、進路指導における職業観研究の重要性が強調される。すなわち、職業的適応や職業的成功を目標とした真の進路指導は、従来から用いられている方法と併せて、個々の生徒の職業観のダイナミックな構造を把握することなしには、とうてい達成できないものである。

教育的、社会的観点から、僻地の中学生にとって、果して何が望ましい職業観であるかについては、具体的には未検討であるが、現在、筆者が継続中の、「個人の職業観とその職場における職業的満足感や職業的適応との関連」から推測しても、自己実現性や社会性に位置づけられた職業観が、かれらにおいても、もっと強く重視されるべきであると考ええる。また、本研究において検討してきた大都市中学生の職業観は、大学生や成人有職者のそれと類似しているものであるが、このことから、もし、大都市中学生の職業観が、より妥当であり、より望ましいものであるとすれば、僻地の中学生の職業に関する価値のおきどころは、かなり偏っていて、しかも職業価値意識が低く、発達のみにて、僻地では、中学生としての職業観の確立が遅れていると断定せざるをえない。

僻地の生徒における上述の歪みや発達上の遅れをとりもどし、望ましい職業観を形成させ、個人に将来、職業的適応、職業的満足感を与えるためには、教科指導、課外活動を問わず、学校教育のあらゆる場において、望ましい職業観育成の施策が、さらに積極的にとり入れられなければならない。同時に、進路指導担当者は、個々の生徒の職業観を把握し、希望職業との関連を個別的に追求するとともに、僻地における職業情報収集、職業研究上の困難性を打破して、

各種の職業における価値体系を理解し、社会的、階層的、職業的期待と役割との関係を明らかにして、生徒の心理的現実を掌握しつつ、適切な助言を進めることが望まれる。また、視聴覚的方法による広汎の客観的な職業情報の伝達・理解を生徒やその家族に対して促したり、職場見学や実習の機会を与えて、啓発経験による生徒の自己評価を進めたり、諸資料、とくに検査・調査結果の分析・解釈の技術の向上をはかったり、進路相談の十分な機会を与えたり、卒業生のフォロー・アップを徹底したり、あるいは経験の豊かな中堅教員を充実させたりなどして、進路指導の拡充が早急に望まれることは言うまでもないが、一方、僻地ゆえに、学校および生徒の環境諸条件も、さらに改善されなければ目的を完全には達成しえないであろう。すなわち、究極の問題は僻地全体の質的改善である。従って、このことは、単に教育問題のみに留らず、もっと広く、生産の基礎手段たる交通・通信の未発達、産業構成の単純さなどに基づく産業不振、すなわち生産力の低さのためにおこる生活不安定・貧困、文化の低さを改善するという、僻地開発・振興のあらゆる施策が、その根底に横たわっている。そのためには、まず生産における人間関係と生産力を改善して、生産様式の近代化を推進しなければならない。そして、広汎な計画経済の中で、個々の僻地の位置づけや僻地の⁽²⁸⁾もつ現実の課題が分析され、その結果に基づいて政治・経済・産業・文化の各方面にわたり、僻地の後進性を除去する永続的な数多の施策を必要とすることを痛感する。

【要 約】

個人の職業選択、職業的適応の不可欠の要因として、職業観をとり上げ、僻地の中学生におけるその実態を把握して、かれらの職業観形成の要因を探求し、大都市ならびに地方都市の中学生との比較検討により、僻地生徒のそれらの特質を分析して、進路指導における職業観の意義を確認し、かつ僻地における進路指導の問題点を解明した。

上述の目的のために、質問紙法、面接法および作文によって、僻地中学生505名、大都市中学生210名、地方都市中学生415名を対象として調査した。

その結果、僻地生徒には就職希望者が遙かに多く、希望職業は、かれらの生活環境とは全く異ったきわめて都会的で明るい清潔な職業としてのイメージを与える若干の職業に限定され、ヴァリエティに乏しく、またかれらの大半は郷里を離れて大都市での職業生活を営むことを希望している。また、僻地生徒は、職業知識が貧弱で、職業選択の動機づけや職業情報を教師や学校で得た者は少なく、かれらは一様に経済性重視の職業観を高く評価することが特徴的であり、職業価値意識が低く、職業観が概して未成熟である。各種の希望職業に関する職業観を検討したが、対照群との間で価値のおきどころにかなりの開きがあり、僻地生徒の職業観に歪みや発達上の遅れが見出される。上述のことは、いずれも、僻地という生活環境の後進性に基づくものと考えられる。

以上のことを従来の研究結果と併せて発達的に考察し、進路指導における職業観の意義についてふれ、さらに職業的適応、職業的満足感を目標とした職業選択のために望ましい職業観を育成することの必要性について述べ、それに基づき僻地において、進路指導充実のためにとく

に必要な施策と、その究極の課題たる後進性を除去し近代化をはかるための僻地開発・振興の問題点を学校教育の立場から言及した。

＜付記＞調査にあたって、島根大学教育学部片山光治、野津良夫の両先生ならびに調査対象各校教職員の方々から懇切なご助言とご協力を賜りました。ここに深甚の謝意を表します。

(S.41.1.21 受理)

註

- (1) Rosenberg, M. : *Occupations and values*. The Free Press, 1957, 1-24.
- (2) 武衛孝雄, 中西信男: Valueに関する研究—学生における職業的価値ならびにその職業決定との関係—日本教育心理学会編「教育心理学年報」1962, 1., 99-100.
- (3) 武衛孝雄: 職業価値観に関する研究「カウンセリング研究」1963, 1., 35.
- (4) 広井甫, 武衛孝雄: 職業価値感に関する研究(1)—対人信頼感との関連—「日本教育心理学会発表論文集」1964, 254-255.
- (5) 武衛, 中西: 前掲書1962, 53-55.
- (6) 武衛: 前掲書1963, 26. 広井甫: 職業価値感の研究「職業科学」1962, 3., 75.
- (7) 天野清: 価値の研究「人間科学」1964, 4., 92-102.
Newcomb, T. M. : *Social psychology*. Tavistock Publications, 1952, 130.
- (8) Raylesberg, D. D. : A contribution to a to a theory of vocational choice. *Psychol Service Center J.*, 1950, Sept., 198.
- (9) 増田幸一: 職業指導論 金子書房 1952., 47-109.
- (10) 武衛孝雄, 片山光治: 離島における進路指導の諸問題—中学生の職業志望および職業観をとおして—「日本教育心理学会論文集」1965, 248-249.
- (11) 広井, 武衛: 前掲書1964, 254.
武衛孝雄, 広井甫: 職業価値感に関する研究(1)日本教育心理学会編「教育心理学年報」1965, 4., 46-47.
- (12) 武衛: 前掲書1963, 26.
- (13) 広井, 武衛: 前掲書1964, 254.
- (14) 武衛: 前掲書1963, 30-31.
- (15) 近藤貞次: 職業心理学「教育学事典」3., 平凡社326-327. (Russell, B. およびRuttenberg, H. J.)
- (16) Spranger, E. : *Psychologie des Jugendalters*. Verlag Quelle & Meyer, 1924.
- (17) Ginzberg, E. et al. : *Occupational choice, an approach to a general theory*. Columbia Univ. Press, 1951, 73-88.
- (18) 増田幸一: 職業希望の個人的発達に関する研究「職業科学」1960, 1., 3-14. 1961, 2., 3-17.
- (19) 瀬川良夫: 中学生の職業観「社会と学校」1949, 5.
- (20) 中村政夫: 中学生の職業観念「職業指導」1950, 7.
- (21) 伊藤惣右衛門: 「職業指導の心理学」金沢書店1957, 307-331.
- (22) Rosenberg : *op.cit.* 124-128.
- (23) Super, D. E. et al. : *Vocational Development, a framework for research*. Columbia Univ. Press. 1957, chap. 3.
- (24) 広井甫 他: 職業観に関する研究「職業科学」1965, 5., 57-61.
- (25) Brim, O. G. Jr. et al. : *Personality and Decision Processes*. Stanford Univ. Press, 1962, 140-162.
- (26) 中西信男: 大学生と職業従業者の間にみられる職業価値感の差異「職業科学」1965, 5., 14-15.
武衛: 前掲書1963, 29-35.
- (27) 中西: 前掲書1965, 9-12.
- (28) 田中豊治: 日本における離島開発の諸問題「郷土」1963, 16., 2-9.